

マルコ11章15-17節 「神の宮は祈りの家」

1A 強盗の巢

1B 礼拝者からの横取り

2B 罪と金の集まる所

3B 神殿信仰

2A 祈りの家

1B 御霊の実

2B すべての民の家

3B 信仰

本文

マルコによる福音書 11 章を開いてください。午後礼拝で 11 章を一節ずつ読んでいきますが、今朝は 15-17 節に注目してください。「15 こうして彼らはエルサレムに着いた。イエスは宮に入り、その中で売り買いしている者たちを追い出し始め、両替人の台や、鳩を売る者たちの腰掛けを倒された。16 また、だれにも、宮を通過して物を運ぶことをお許しにならなかった。17 そして、人々に教えて言われた。『わたしの家は、あらゆる民の祈りの家と呼ばれる』と書いてあるではないか。それなのに、おまえたちはそれを『強盗の巢』にしてしまった。』」

イエス様がついに、エルサレムに入城されます。棕櫚の聖日と呼ばれる日曜日、ろばの子に乗られてエルサレムに来られました。その時に、人々がご自身を「11:9 ホサナ。祝福あれ、主の御名によって来られる方に。」と叫んで迎え入れるのですが、イエス様が神殿の様子を見て、ここで読んだことを行われました。宮清めと、しばしば呼んでいます。ユダヤ人たちが神を礼拝していたところが、商売をするところと化してしまい、また礼拝をする人々からだまし取る強盗の巢になってしまったことを、イエス様は嘆いておられます。今朝は、イエス様の言葉から、今度は今、聖霊の宮と呼ばれている私たち自身、また教会を見て行きたいと思います。

1A 強盗の巢

イエス様は、ここで二人の預言者の言葉を引用されています。17 節の「わたしの家は、あらゆる民の祈りの家と呼ばれる」というのはイザヤ 56 章 7 節から、「強盗の巢」はエレミヤ 7 章 11 節からです。強盗の巢というのは、いわゆる強盗たちの集まるアジトです。どこから盗みを働いたら、ここに集まって奪い取って来た金銭や貴重品を数えるようなことをしていた、ということでもあります。

1B 礼拝者からの横取り

マタイによる福音書の時にも説明したので、思い出せるかもしれません。ここでは、売り買いしている人たちがたくさんいました。今でも、エルサレムの南東にある考古学公園では、神殿に上がる

階段の付け根の部分で、商店の跡があります。もし、商売だけならまだよかったかもしれません。教会だって、何か物の売り買いは全くないとは言えません。

けれども、神殿を管理している宗教指導者たちは、礼拝をしている人たちから、不法に利益を得ていたのです。両替商がここにいるのは、神殿に捧げる金、献金は神殿のためのシェケルでなければいけません。普段は、ローマの通貨を使っていたのですが、そこにはカエサルCaesarの銘が彫ってあります。彼自身が神として崇められており、またその硬貨は偶像にささげられた肉を買うために市場で使われている可能性が大ですから、神殿には納められないのです。けれども、両替をする時に、かなり大きな手数料を取っており、それで彼らはかなり経済的に潤っていました。

さらに、鳩を売る者たちの腰掛けとありますが、これは神殿でいけにえに捧げるための物です。牛や羊、また鳩を捧げますが、それには欠陥があってはならない。しみや傷があってはならないという規定があります。それで、彼らが携えてきた家畜をしらみつぶしに見て、欠陥になっているような部分を指摘して、それで「こちらは、祭司長たちが欠陥がないとする認定された家畜がいます。これを買いなさい。」ということになります。そして、その値段がべらぼうに高いのです。そして、「宮を通して物を運ぶ」は、東から西へ、西から東に行くのに、迂回するのを面倒くさがって、そこを通過していた人々のことを指します。

2B 罪と金の集まる所

神が住まわれ、聖なる方がおられるところで、むしろ罪がはびこり、また金が集まって来るという状況でした。実は、これはエルサレムの神殿に限ったことではありません。むしろ、異教の神殿では、あまりにも当たり前に行われていたことであり、エルサレムの神殿でもその異教的なものが入って来てしまった、と言った方がよいかもしれません。

ローマ時代には、アルテミス神殿を始め、皇帝を祭る神殿など、いろいろな神殿がありましたが、そこには金庫のようなものがあります。神殿の奥に、貴金属や貨幣を入れていた保管庫のようなものを、ラオディキアの神殿で見ました。お金を持っている人たちは、自分で持参していれば盗まれてしまうので、地中に埋めることもするのですが、神殿に保管してもらうこともしたのです。ですから、銀行と言えば神殿にあり、みたいなどころがありました。

でもどうして、神殿にお金を預けるのでしょうか？それは、盗人が盗みにくくするためです。神殿の中から金を盗むというのは、相当の勇気が必要です。いわゆる「罰(バチ)」が当たるのではないかと恐れられました。神殿には神がいるから、そこから金を盗むことは神の怒りを買うという恐れが出てきます。それで、盗人が神殿には手を出さなかった、と言うことが言えます。

こうやって神殿には、お金が集まりやすい場所になっているのです。欧米では、マフィア、つまりヤクザみたいな人たちが、教会に多額の献金をしたりします。そうやって、自分たちのしていること

罪を贖うために献金しているのです。実は、宗教とお金というのは近いところに隣り合わせになっているという現実があるのです。

そしてお金だけでなく、罪も集まりやすいです。今のマフィアのような話がそうですね。自分の罪を悔い改めるのではなく、むしろ覆い隠すために宗教行為に走ります。自分のやましいことを、宗教をすることによって贖おうとするんですね。けれども、もちろん自分の罪を認め、それを言い表し、悔い改めなければ、罪は赦されません。

そして、アルテミスの神殿の遺跡の前で聞きましたが、そこには社会的に制裁を受けるような人々が神殿の境内に逃げて来たそうです。その中は、聖なる所であり、汚れた人たちは立ち入ることはできないとされていました。ですから、社会的に問題だと思われる人々がそこに避難してきていたのです。非常に異様な雰囲気立ち込んでいたことでしょう。

イスラエルとパレスチナの抗争を描くドラマを以前見ましたが、イスラエルの治安部隊がパレスチナにいるハマスの要員を摘発するために浸透します。けれども、彼らは重要な取引を、アラブ・パレスチナ人の教会で行うのです。モスクの中に拳銃を持って侵入したら、それも後で非難轟轟になりますが、教会の中で拳銃を発砲させるものなら、国際的な非難は一たまりもありません。ですから、教会の中が安全なのです。つまり、教会がテロ活動を匿っているということになります。そのドラマはフィクションですから、実際のことではないですが、十分、あり得る話でしょう。

3B 神殿信仰

そして、ここには神殿の建物や敷地自体が、神によって守られているという信仰につながっています。この神殿があること自体が、ご利益がある、救いがあると思っていたのです。それで、エレミヤがそこで、礼拝のために門を通して入って行く人々のところで、預言をしなさいと命じられました。「あなたがたは、「これは主の宮、主の宮、主の宮だ」という偽りのことばに信頼してはならない。(7:4)」ここが主の宮だから、主の宮がここにあるから、バビロンから私たちは守られ、救われるのだということです。けれども、悔い改めなければ、あなたがたは追い払われると警告しました。

私たち信仰者は、絶えず、ユダヤ人たちが通った同じ過ちを犯す危険があります。今の神殿は、自分自身の体、聖霊の宮です。ですから、建物ではなく、自分の体で行っていることですから、さらに切実です。それは、「霊的な装い」をすることによって、自分の罪や欲をむしろ隠しおおせるということです。教会に触れれば、それだけ知識としてはキリスト教について知ることができます。ですから、その知識を使って罪を犯し、むしろ霊的なことをやっているとして隠しおおせるのです。

自分が誰かを恨んでも、それを上手に自分がキリストの正しさをもって言っているのだとして、ますます人を恨むためにその義をふりかざします。宗教指導者がまさにそうでしたね。これから見て行くことになりましたが、ユダヤ人指導者がイエス様を捕らえる時、彼ら自身の定めている掟をこと

ごとく破って行きました。私は、靈的に敏感だから人々のことが分かります、と言って、実は自分の気に入らない人をただ裁いているだけかもしれません。けれども、人を裁いていると、むしろそれは神のために行っているのだと、ますます靈的に見せることができます。また、自分が世の中のことで心が一杯になっていると、教会の中にいるのが窮屈になってきて、いろいろ粗捜しを始めます。世の判断で、御霊によって行われていることを推し量ろうとするのです。こうやって、その人の生活はすっかり偽善です。表と裏があまりにも対照的であり、はっきりとしています。気づいていないのは本人です。

ですから、表向きは主に仕えているけれども、実際はその正反対のを行うことが、実に簡単に出来てしまいます。イザヤが、このことを語りました。「66:3 牛を屠る者が、人を打ち殺す者。羊をいけにえにする者が、犬の首を折る者。穀物のささげ物を献げる者が、豚の血を献げる者。乳香を記念として献げる者が、偶像をたたえる者。実に彼らは自分の道を選び、そのたましいは忌まわしいものを喜ぶ。」牛を屠る、羊のいけにえを捧げる、穀物の献げる、これらの礼拝行為をしながら、人を打ち殺す。豚の血を献げる。偶像を称えるというようなことを行います。

それで主は、「イザヤ 66:2 わたしが目を留める者、それは、貧しい者、霊の碎かれた者、わたしのことばにおののく者だ。」と言われました。宗教的な言い方で装うのではなく、真実に、心から主を求め、心砕いていただき、御言葉に応答できるようにしていただきます。

2A 祈りの家

それでは、神の宮では何をしなければいけないとイエス様は言われたのでしょうか？「**祈りの家**」と呼ばれる、と言われています。私たちの教会が、そして自分の生活が、「聖霊によって、神に祈りを捧げている」という宮になっているかどうか？であります。

ソロモンが神殿を建てた後で、神殿とて神をそこに収めることはできない、天の天も収めることはできないと告白しました。そして、御名をそこに置いてくださいと願い、神殿に向って祈るのであれば、その祈りを聞いてくださいと祈ったのです。特に、人は罪を犯さない人はいないから、人が過ちを犯している時に、へりくだって祈るなら、祈りを聞いてくださいと祈りました。

1B 御霊の実

みなさんは、教会のために祈っているでしょうか？また自分の周りの人たちのために祈っているでしょうか？また、自分のために祈っているでしょうか？

祈っているかどうか、それが分かるのは、「聖霊の実」であります。「ガラ 5:22-23 しかし、御霊の実は、愛、喜び、平安、寛容、親切、善意、誠実、柔和、自制です。このようなものに反対する律法はありません。」この宮清めの出来事の前後でイエス様は、いちじくの木を見て実を取って食べようとしたところ葉しかなかったのもので、それで呪われたところ、根こそぎ枯れていました。それは、

宗教はあっても実が結ばれていないイスラエルの姿を表していたのです。もし実を結ばせておらず、宗教性だけがあるのならば、必ず、そのように表向き霊的に見せているものさえもが、そのメッキが剥がれ落ちて、自分が神に対して心を頑なにしていたことが明らかにされます。

でも、祈っているけれども、実が結ばれないのはなぜ？という人がいるかもしれません。その祈りの内容を検証してみましょう。それが、単に自分の願っていることをかなえてもらうものになっていないでしょうか？真実の祈りは、神の御心を自分が行うことができるように願う祈りです。主が命じられていることがあり、それを行うことができるように祈ることです。御霊が自分にへりくだりの心を与え、その命令に聞き従うように導いてくださいます。けれども、もし、自分の願っていることをただ話しているのであれば、霊的な実が結ばれることはなく、いつも同じ生活をしてしまっています。

2B すべての民の家

そして、イエス様は、「**あらゆる民の祈りの家**」と言われました。イスラエル人だけでなく、御言葉を守る異邦人も、共に、主を礼拝することができるようになることをイザヤは預言しました。ユダヤ人と異邦人には、壁がありました。イエス様の時代、神殿には異邦人の庭があり、それを越えて中に入ったら、殺されても誰も罪に問われません。しかし、キリストが十字架で死なれたことにより、この方が平和となり、二つを一つにしてくださいました。

ゆえに、私たちは新しい人々を、主にあってお迎えするのです。受け入れるのです。自分ばかりが与えられるのではなく、自分自身も与えます。つまり、古い皮袋ではなく、新しい皮袋に新しいぶどう酒を入れるのです。さもなければ、全ての人々、新しい人々をお迎えができなくなり、自分自身が破れてしまうし、また相手もだめにしてしまいます。あらゆる人が、主への祈りの中に入ることができる、そういった礼拝と交わりが必要です。

3B 信仰

最後に、祈りに必要なのは信仰です。イエス様が、根こそぎ枯れてしまったいちじくの木を見たペテロが、枯れていることを指摘したら、イエス様は大胆にもこう言われました。「23 まことに、あなたがたに言います。この山に向かい、『立ち上がって、海に入れ』と言ひ、心の中で疑わずに、自分の言ったとおりにになると信じる者には、そのとおりになります。24 ですから、あなたがたに言います。あなたがたが祈り求めるものは何でも、すでに得たと信じなさい。そうすれば、そのとおりになります。」信じるのです。主が御心として表しているもの、聖書の言葉、神の言葉で約束しているものは、その通りになるという確信を持ち、それから今の願いを立てていきます。そのために、私たちに実が見えます。その実を主に捧げするのです。